

進捗状況の概要

本補助事業は、本学の特別入試、とくに現在の A0 入試を抜本的に改革し、多面的・総合的に志願者の意欲、適性、能力、基礎学力を見極める入試を構築することを目的とする。募集定員を現在から倍増させ、文理合わせて全学で 20 人規模とし、丁寧で手間をかけた本学独自の新フンボルト入試を実施する。高大接続の要素をもつプレゼミナールおよび独創的な二次選考を通じて、基礎学力を担保しつつ受験生のもつ潜在力（ポテンシャル）を見極める。大学入学時に知的ピークを迎える学生ではなく、入学後の学修のなかで能力を大きく伸ばし、大学院に進学し社会に出てからさらにリーダーとして飛躍しようような「伸びしろ」のある学生を選抜することを目標とする。

平成 27 年度は、本補助事業の推進にあたって、骨格の主要部分をなすプレゼミナールの試験的实施とそれに伴う効果検証を行い、新フンボルト入試の制度設計の詰めの作業を実施した。具体的には、プレゼミナールの実施要項（プログラム）・実施体制を確定し、新型 A0 入試と連動させたプレゼミナールの広報活動を多角的に実施した。8 月 24 日（月）・25 日（火）には第 1 回となるプレゼミナールを開催し、全国から文理合わせて 245 名の高校 2, 3 年生、17 名の高校教員を迎えて各種セミナーや図書館情報検索演習を実施した。その際に、受講生に受講アンケートをとり、感想・疑問・要望を分析した。これを受けて、次年度の新フンボルト入試・二次試験（図書館入試・実験室入試）の選考方法についても、その円滑な実施を可能ならしめるように細部にわたって検討を加えた。

また、本学に受験実績のある高校、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）やスーパーグローバルハイスクール（SGH）を重点的に訪問し、現段階の新フンボルト入試の構想を具体的に説明し、幅広い意見を収集した。特に SSH や SGH に選定されている高校を重点的に訪問したことで、高校教育の現場（とくに課題探究型教育の現状）、実際に指導にあっている高校教員からの受験や進路指導に対する基本姿勢や率直な意見、A0 や特別入試全般に対するイメージと高校側の対応姿勢、そして本事業構想に対する意見を幅広く聴取できたことは、本入試改革において有益かつ貴重な情報となった。またこうした SSH や SGH 指定校への訪問等で、本入試の志願者層をプレゼミナール参加へ誘引する方向へとつなげることができた。さらにはメディア各社の取材等を通して本入試改革を周知し、プレゼミナール参加者をより幅広く引きつけることができた。他方、夏休み間際には高校側では生徒への情報伝達が困難になること、したがって広報活動（とくにプレゼミナール）については、早期に着手すべきであること等、課題もさまざまに認識できた。またメディアへの露出が大きく影響することも痛感した。こうした経験を大いに活かし、次年度以降広報戦略を入念に練る予定である。

また、広くプレゼミナールおよび新フンボルト入試の内容を紹介し、その魅力を示すツールとして、新フンボルト入試広報ビデオを製作した。これを次年度以降の広報活動に活用する方針である。

さらに、8 月のプレゼミナールの際に、本事業の外部評価委員 5 名（富山県教育委員、浦和高等学校長、お茶の水女子大学附属高等学校副校長、東北大学教員、九州大学教員）にお越しいただき、プレゼミナール全般を視察していただいた。そのあとで外部評価委員会を開催し、多様な観点から本事業の問題点や改善点を指摘してもらった。また、年度末には、各種資料を送付し、書面での取組評価を依頼した。こうした外部からの意見を伺うことで、新フンボルト入試の制度設計や広報活動、準備状況や体制などに関する多様な観点、とくに高校教育側の観点から本事業の問題点や改善すべき点を指摘してもらい、また新規のアイデア等を頂戴して、プレゼミナールおよび新フンボルト入試制度のより実践的な改善を行える体制を構築できた。とくに入試の実施時期、高校側の本入試改革への評価と課題、また図書館入試や実験室入試というユニークな試みに対する評価とさまざまな懸念をご指摘いただいたことで、新フンボルト入試の制度設計をさらに緻密に練り上げることが可能となった。

平成 28 年度の本格導入に向けて、学内での丁寧な合意形成を図り、本学ホームページ上にアップすると同時に、次年度に向けての高校への広報活動に着手した。

以上、当初予定した平成 27 年度の事業計画はおおむね順調に遂行できたものと考えている。